さなが、使者つて丁つたので、出るこもう電車は止まつてゐるし、午後、お受けに及ぶ。

――もう一晩。お厄介になつてもいゝかねと仰せある。謹んで、

――この近所にバアがないだらうか。と來た。

――さア。あるにはあるが……

と、その「あるにはある」方へ向つて、ブラリブラリと歩く。四谷のばな通りは悉く寂靜まつてゐる。鹽町まで辿りつく。筋かひに相對して、バアがまだ二軒起きてゐた。二人の中、若旦那は双方を前後に越しに覗いて見て、

――こつち方の方が一寸淺草の向け方がゐる。と、飯ちその方へつた這入る。

カキフライを並べて、かなり水つぽい、少々酸味さへ加はつた櫻正宗にとりかゝる。一組の騒がしい客が歸ると、あとは我々二人ばかりになる。それから入口に近いテーブルに陣取つた色白のニコ〳〵した逞しい壯漢だけが殘る。壯漢はしきりにウヰスキイの杯を重ねてゐる。若旦那の說によれば、彼れの顏は飛行家のスミスに似てゐるさうだ。

壯漢にかぶれたゐだらう。二人のテーブルにもウヰスキイのコップが並ぶ。一時近くなつても、この二組の客は中々立つ景色がない。肉付のいゝ兩名の美人も、大いに愛想をつかして、ストーブを背にしながら、リーダーをひろげて、英語の勉强をはじめる。と、見てゐると、わが親愛なる若旦那は、椅子を離れて、二つの美しい男の間へ、その樂しみ滿々たる首をさし込み、大きな聲で、リーダーの音讀をやり出す。

日の光を浴びて

（一）

水野仙子

日は照れど、日は照れど
君を見る日の來なければ
わたしの心はいつも夜

日は照れど、日は照れど
わたしは目盲ひ、耳聾ひ、啞者
君を見もせず、聞きも得ず

「日が照つてゐる……。」

さう呟きながら、私は部屋の隅から枕を巡らして、明るい障子の方にその面を向けた。南向きさいふ事は何といふ幸福な事でさいう、それは冬の滋養を大半領有する。日の光は今頑固な朝の心を解いて、その晴やかな笑顏のうちに何物をも引きずり込まないでは置かないやうに、こゝを開けよとばかり閉ぢられた障子の外を輝きをもつて打つてゐる。

私はそれに從はないではゐられなかつた。手をのべて、しかしなか〳〵届きさうもなかつたので半身を乘り出して、それでも駄目だつたのでたうとこう起き上つてまで、障子を左右に開いた。日光は柔かに導かれ、流れた。その光が漸く滿園の端だけに觸れたのを見ると、私は躍んでその寢床を日光の眞中に置くやうに引いた。それだけの運動で、私の息ははづみ、頰に血がのぼつた。そして暫く枕についてからも鼓動が納らなかつた。

「日が照つてゐる……。」

それはほんたうに幸福な事である。けれども……鼓動が全く靜まつて、血の流れがもとのゆるやかさにかへつた頃、極めて靜かに歩み寄つて來るもの佗びしさを、私は心に迎へなければならなかつた。それは力の弱い冬の日だからだらうか？　否！　どうして彼女の力を侮る事が出來よう。お聞きでないかあのもの靜かな寬の音を。見る通りに雪は眞白く山に積つてゐる。そして日蔭はあらゆるものの休止の姿で靜かに寒く默りかへつてゐる。それだのに同じ雪を戴いたこゝの庇は、彼女にその命え切つた心を溫められて、今は惜しげもなく愛の雫を滴らしてゐるのだ。

太平洋畫會展覽會瞥見

太平洋畫會を瞥見した――といふよりは、實のところ、暗くなつてから駈け足で會場を一巡したのであるから、文字通りに甚だ無責任な瞥見にすぎない。寧ろ耳で聽いた方が多い事を斷つて置く。太平洋もこれで第十六回ださうで、今度は會員及び研究所生徒並びに研究所出身者に限つたといふのが、更に新しき歩みに移らんとする氣勢を示してゐて甚だ心强いと言はなければなるまい。先づ四十九點の水畫では、曉霞、英輔、吉田ふじを、大橋康邦、小野田元熙、小野以文、早川國彦氏等の作品が陣取つてゐる。油繪は二百十餘點もあるが、會員では、柚木、藤谷、石川、中川、吉田博、安田稔、永地、渡邊、背木、不折、眞夫、三上、小野田、高橋虎之助氏其他を擧げる事が出來る。第二部を以て自由出品としてあるやうだが全體として見ても自由出品の形を呈してゐるためか、極めておつとりとした作品の方が多いので他流試合式の競爭心が先に立つてゐる多くの展覽會などに比べてはいかにものんびりとしてゐるところが安易な氣持で見られるが、さてそれだけに惡く言へば間が抜けてゐて、新進の作家の作の中にも、これは之驚いて立ち盡くす程の傑作も見出せない。正直なところ大家諸氏の顏合せさへも見られやう、それでも結構だ。彫塑は餘りに寂しいし、第二部は特に何物をも感じさせては呉れない。今回はアトリエルでは小波氏が出してゐない代りに、徳川義恕男が進境を見せてゐる外、土井利孝子の出品、東京社の慶見止水氏の敗點などいふ珍らしい顏もある。第一部の方へ、慈井常の名で二點出してゐるのは、文學士義井玆常伯その人なのださは面白い。

（廿七日迄於竹之臺陳列館）

一日一信

雲舟

今年は寒い、寒いと人は言ふが、私は今まで少しも寒いと感じたことがなかつた。私の胸の火は活々と燃えてゐるので、熱くつてたまらないのです。ところが昨夕ばかりは、雪風の寒さに世界感冒といふのに取りつかれさうな氣がした。新聞であまり感冒のことを書き立てるので、私は先づ感病風に罹つたのです。あまりおどかされると本物の感冒になるかも知れぬ。

のをいゝ事にして、飛びかゝつて、きやしやなその腕をねぢり上げたりした。その有様を見て、妹は大いに怒つた。さうして物なぞ投げ散らした。若旦那はこう〳〵泣き出した。私は慌ちた。

凡てが酒から生じたのだ。中谷君は評論の修業に志してゐる人だ。この二日間の出来事が、何かの参考になつたら私の幸福はこの上もない。私の狂暴な血もかうした憤怒を度重ねるにつれて、次第に浄化されてゆきつゝあるやうな心持がする。

巨大漢も歸つた。中谷君も歸つた。私はまた机に向つて、机上に堆積した各雑誌をば、これから一つ〳〵読んでゆかなければならない。

日の光を浴びて（二）

水野仙子

タッ！ タッ！ タッ！ あゝあの音を形容するのはむづかしい、何といふ文字の貧しい事であらう、あれあんなに優しい微妙な音をたてゝゐるのに……。それは如何にも、あの繊麗な雪が落ちて、露の玉になつて樋の中へ轉び込むのにふさはしい音である……轉び込んだ露はころ〳〵と響に誘はれて流れ、流れる水はころ〳〵と響を導いて行く。

何といふ静かさだらう！絶え間もなく庇から露が散る。水晶が碎けて落ちるやうに、否、光そのものが散つ來るやうに……。

日は照れど、日は照れど日の照る間は短いにいつまでわたしが待つたなら凝乎と、冬の日の中に横へられた私の體の中で、柔かな暖かさに包まれながら、何といふもの寂しい聲をたてゝ私のこゝろの唄ふ事だらう！一寸でも身動きをしたらその聲はすぐに消えよう、瞬きをしてさへもその聲は絶える。

馬の背中に鞍おいて
淺間の煙仰ぎつゝ
麓をめぐり來ますらむ……

古い名を持つ草津に隠れて、冬籠る身にも、遥々と高原の雪を分けて、うらゝかな日は照つてゐる。

「日が照つてゐる……。」

さうしみ〴〵思つた時に、涙らしいものが暖かく私の頬をうるほしてゐた。

○

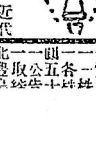
短い命ではあつた。それは冬の日の定められた運命である。内端な女心の泣くにも泣かれず凍つてしまつた檐の雫は、日光を宿したまゝに小さな氷柱となつて、暖かな言葉さへかけられたら今にもこぼれ落ちさうに、寒の中を凝視めてゐる。

夕暮こゝ共に寒さは急いで歸つて來た。雨戸をさす間もなく、今まで遠くの林の中に聞えてゐた風の音は、巨人の手の一塊りのやうに、吾にもない疾さで襲て來て、その勢ひの中に山の雪を一掃き捲き込んでしまつた。その音づれにすつかり目を覺した地上の雪は、慌られ！〳〵て來る風の中にさら〳〵と舞ひ上り、くる〳〵と巻かれてはさあつこと人の家の雨戸や屋根を打つ事に身を委してゐる。その風聲の一握りのつぶては、時々毛のやうな隙間の際や戸際子の仲を盗み入つて、目に見えぬ冷たいものをバラ〳〵こと私の寂寞にふりかけて行く。寒怠もやがて夜着の襟に白く花咲くであらう、これが草津の常の夜なのである。けれども嘶れては何物も悲しい、吹雪よ、遠慮なく私の顔を撫でゝゆけ！

海外文藝消息

▲タゴール翁の哲学　印度マイザ●マハラジャース大學教授のマムラン會社から "The Philosophy of Rabindranath Tagore" を出版した。ザ・デイリ！●ニュース紙は曰く「此の「タ翁の哲學」の如き解説的の著述は何人にも要望されたるものなるが今茲にラダークリシュナン教授の大作を見るに及んで吾人は多大の興味を感ぜざるを得ず、殊に其政治哲學の草の如き「國際聯盟」の語が何人の日にもせられると今日に於ては吾人に敬ふる處のもの尠からず云々」と。四六判布製定價八志六片

新刊紹介



◎漂泊の青年（田中早苗譯）近代世界快著叢書第八編英國浪漫派作家ロバート・ルイス・ステヴンソンの冒險小説を面白く譯出したり（ポケット形二八一頁價八十五錢神田區南神保町二白水社）

◎漁業基本調査報告第七冊の一大正七年地方水産試驗場實地觀測並に遠蚕の觀測報告に就て、大正四五年地方横斷觀測に就て、大正四五年瀬戸内海鯛漁場海産調査（第九廻行）の三報告を收む（四六判布製定價八志六片）

◎話藁　少女對ベルの音（遠澤青花著）著者の少女對話七篇、滑稽對話九篇に附録として朗讀對話二篇を添へたるもの、龍子氏の裝釘美しく、著者の才氣はまことに面白くよき讀物を少女の智德の襁として提出したり（四六判二二八頁價八十錢京橋區南鞘屋町十二實業之日本社）

新刊雑誌

▽日本一（二月）▽活動之世界（二月）▽審美（八ノ二）▽家庭のローマ字（二月）▽ローマ字（十四ノ二）▽有効の活動（二月）▽判例彙報（卅ノ二）▽鶏世界（二ノ二）▽心の花（二百五十號記念）▽同人（三二）▽經濟資料（五ノ二）▽商科學報（廿四ノ二）▽通商公報（五九〇）▽濟生會々報（十七）▽蠶業新報（三一一）▽禮（二月）▽産業組合案公報（五二二）（五二三）▽産業組合（八ノ十二）▽ジャパンタイムス學生號（五五五）▽國民法律（九八）▽日本タイムス（十六ノ二）▽ホトトギス（二月）▽大觀（二月）▽密宗學報（六八）▽藝術（二ノ二）▽三田文學（二月）▽美髮（十四ノ二）▽潮音（二月）▽新潮（二月）▽植長（十二）▽詩篇（二月）▽蒼空（二月）▽我が國（二月）▽實業之日本（二月）▽實業公論（二月）▽獨立公論（新年號）

一日一信

N

素人芝居等を道樂に演ずること冷かされたが、昔通したが、正面を向いてる顔附を無臺にその儘持出すと顔るあふのいて見える物だと云ふ事が、他の注意に依つて初めて發見された程、演技に關する一舉手一投足の技巧と云ふ事が解つた。矢張り百聞は一見に如かずだつくづく了解させられた。

つたのを、昆蟲類から小石や土くれにも魂魄と精神とのあることを知らうとする人に乏しく、それを知つても、それ等のものを共に勞はらうとする人の尠いのを嘆んでゐます。無論動物を書いた小説もないことはない。しかし私は愛さいふことを人間界にのみ局限せずに、廣く動物、植物、鑛物にまでも及ぼさうとする努力を、もつと〳〵強く望んでゐます。『病める薔薇』の作者は、そんなことに於て、私とは全く考へが違ふのかも知れません。しかしたゞあれだけでも、それ等のものが可なり微細に作中に取り入れたこの小説を、大方の人が、嬉しいのであります。

日の光を浴びて

(三)

水野仙子

クリスマスの裝飾に用ゐた寄生木の大きなくす玉のやうな枝が、ランプの光に枝葉の影を見せて天井に吊されてゐる。夜の色にその葉の緑は黒ずみ、可愛らしい珊瑚珠のやうな赤い實も眠たげではあるけれども、荒涼たる冬に於ける唯一の彩りが、自然の野からこの部屋に移されて、毎日どれだけ私の眼を慰める事であらう。しかしあの赤い水々した實は、長い〳〵野の雪が消えるまでの間を、神が小鳥達の糧食にと備へられたものではないかと思ふと、痛々しく飽を入れた人の罪が恐ろしい。その時あの赤い小さな實がどんなにほろ〳〵と雪の上にこぼれた事であつたらう！

病んでゐる胸には、どんな些細な微かなものでも傷はり響く。そして死を渇望すれば渇望する程、何ごとかいふすべてが私に恭はしく懷しまれる事であらう。火鉢の火が赤いのも、鐵瓶が微しい響きに湯氣をたてゝゐるのも、ふと擦げてみた夜著の裏が甚だしく色褪せてゐるのも、すべてが皆私に向つて生きてゐる——この年、この月、この夜——すべてが私にそれでいゝ！おゝ、外にはますます吹雪の暴れる事よ。

「あれが人世なのだ！」

「そして室内は？」

「これもやつぱり！」

私は戸外に耳を聳て、それから少し首をもたげて靜かな部屋の中を見廻しながら、自問自答をした。

⊖

ほかりと目を開いたら、朝が待ち構へたやうに硝子の外から私を覗いてゐた。夢と現の境ごろに、近くで一發の獵銃の音が響いたやうだつけ、その響で一層あたりが靜かにされたやうな朝である。

山を切り崩して、それに引添ふやうに建てられたこの家の二階からは、丁度迫らぬ程度にその斜面を見渡すことが出来る。雪に蔽はれたその切り崩しの斜面に、獸の足跡が、二筋についてゐるのは、犬か何かゞ驚け下りたのであらう、それも、雪崩れになつて轉げ下りて來た塊りの走つた跡でもあらうかと、そんな事を私は思ふこともなく思つてゐた。

空は蒼かつた。それは必ゝ風雪に暴れた翌朝がいつもさうであるやうに、何も彼も拭はれて清く青黄ばんだ」かつた。混沌として降り狂つた雪のあゝこの晴た空位又なく麗はしいものはない。地には光があり反射があり、空には色と響とがある。空氣は澄んで〳〵澄み切つて、ぎんな科學者にもそれが其應にあるといふ事を一時忘れさせるであらう。

その美しい空に奪はれてゐた眼を、ふと一本の小松の上に落すと、私は不思議なものでも見付けたやうに、暫くそれに目を凝らした。その小松は、何處からか光を受けてゐらしく、丁度銀モールで飾られたクリスマスツリーのやうに、枝々が光榮にみちてぐるりに輝いてゐた。

一朝日が出て來たのらしい。」

さう思つて私はまだ自分の眼には隱されてゐる大陽の笑顔を想像の中に探し求めた。けれども私はそれをさう長く待つには及ばなかつた。小松は刻々に輝きを增して行つた。そして、今までその背景をなしてゐた空は、その青さは、刻々に光の海と化しつゝあつた。眩しいものが一閃、硝子を透して私の眼を射つた。

小松の枝はもう無かつた。その後、それは光の中に光り輝く斑點であつた。太陽が、朝日が、彼自らが、山と空とを翔つた雪の線に、その跳く面を現はしかけてゐた。光は直線をなしてその半圓の周圍に散つた。彼を見ようと思へば私は眼をつぶらなければならなかつた。

そのために幾度か瞼を閉ぢ〳〵した。涙が徐にあふれ出でゝもう直視しようとはしない眼瞼に光を宿して止まつてゐた。

それは大陽の强烈な光線が私の瞳を射つたからではなかつた。反對に、光は柔かに私の胸に滲み入つたのである。

「ミミミい、それでいゝのだ、たゞ私が明日死ぬとしても！一生をかけて目指して來た私の仕事に少しもまだ手がつけられなかつたとて、たゞひ手紙が書きかけであつたとて、糸を通した針がまだ半襟から拔かれないであつたとて、それで死んだとて、それでいゝのだ！　いつ私がこの世から消されたつて、あの光は少しも變りなく照る。それと同樣に、いつまで私がこの世に役に立たなく生きてゐても、やつぱり變りなくあの光は照る！」

あゝ、おてんとうさま！

私は起き上つて、折から運ばれて來た金盥のあたゝかな湯氣の中に、草の葉から搖ぎ落ちたやうな涙を靜かに落したのであつた。

（一九一九、一月）